

Title	2. 国際結婚の子どもたちへの支援 : 農村地域の取り組み
Author(s)	藤田, 美佳
Citation	GLOCOLブックレット. 8 P.39-P.46
Issue Date	2012-03-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/48240
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

II 取り組み事例と 課題の共有

2. 国際結婚の子どもたちへの支援——農村地域の取り組み

藤田美佳 神奈川大学人間科学部非常勤講師

藤田美佳 おはようございます。今日は、国際結婚の子どもたちへの支援について、秋田県のボランティア団体「のしろ日本語学習会」の取り組みを含めてお話ししたいと思います。今お話し下さった能勢さんや、小島さんの地域は、トランスナショナルな子どもたちが沢山いる地域ですが、私がお話しするのは、いわゆる「少数地域」での取り組みです。

内容ですが、資料を2種類お配りしております。一つは『解放教育』の2008年8月号から「日本人男性と国際結婚した海外出身女性の日本語学習——子どもの成長を支える親としての学び」と、2010年3月発行の東京学芸大学国際教育センター紀要『国際教育評論』に掲載された「外国人少数地域における多文化の子どもに対するサポート」秋田県藤里町において、たった一人の外国児童の編入を契機にサポートをシステム化した取り組みです。当初は、藤里町の支援のシステム化についてお話しする予定でしたが、今日は、のしろ日本語学習会で学んでいた、現在、東京外国語大学2年生の松嶋美恵さんも参加してくれるということと、今回のワークショップ企画者の方々、

藤田美佳

日本酸素株式会社(総合職)、白神インターネット協議会事務局(能代市役所情報統計係)勤務を経て、1999年東京都立大学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程に入学、同博士課程単位取得退学。

1996年に出身地の秋田県能代市のボランティア日本語教室「のしろ日本語学習会」に参加し、中国帰国の子どもたちの教科及び日本語学習、進学支援に関わったことをきっかけに、大学院に入学し、多文化社会の地域づくりに関心を寄せ、実践的な研究を進めている。

神奈川大学非常勤講師、法政大学兼任講師

専門：社会教育、多文化・異文化間教育

のしろ日本語学習会の見学に行ったことから、今日は、のしろ日本語学習会の話を中心にさせていただいて、追加情報として、藤里町の取り組みに触れていきたいと思います。

はじめに少し自己紹介をします。私は秋田県能代市の出身です。大学卒業後、民間企業に勤務しており、96年にたまたま実家に帰って休養をしていたところ、日本語教室に出会って(はまって?)! しまいまして、市役所内で仕事をしながら、大学院入学までの3年半程、ボランティアとして、のしろ日本語学習会に参加しました。大学院に進学後は、実践的な研究に取り組み、定期的に訪問しているという状況です。

ボランティアを始めた当初、私は、中国帰国の子どもたちと、比較的、年齢が近かったということもあり、学習サポートに関わっておりました。ここにいらっしゃる皆さんのなかにもそういう方がいらっしゃるのではないかと思います。ボランティアからスタートして今研究に取り組んでいるというところ。私は専門が社会教育でして、識字教育や成人教育に関心を持ち、国際結婚の女性たちと夫のエンパワーメント、家族を含めたエンパワーメント、教室に参加しているボランティアの人たちの生涯学習について研究しています。また、国際結婚の子どもたちや、今日参加している松嶋美恵さんのように、大学に進学したり就職したりした日本語教室の子どもたちも含めて、本人や周囲の人々に話を聞きながら、研究を進めています。

外国人少数在住(散在)地域というのは、

実は各地にあります。昨今ようやく報告されるようになったと思います。今年度は、福島県国際交流協会の「外国につながる子どもの健全育成ワーキンググループ」の継続的なワークショップに関わりましたが、農村や山間部など、国際結婚の子どもたちは各地で見受けられますし、文科省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の在籍状況から見ても、少数しか在籍していない学校が多数あることが把握できます。

さて、ここ大阪にいと、秋田県についてはイメージしにくいかと思しますので、「秋田県ってどんなところ？」に少し触れておきます。

人口は108万人、大阪に比べたら非常に少ないですね。県民の半数、50万人以上が秋田市に在住し、半数が残りの12市9町3村に居住しています。統計的な特徴としては、高齢化率、自殺率が、全国1位というワースト1です。さらに自殺率は、15年連続第1位というなかなか厳しい状況にある地域です。そして婚姻率は全国でも最も低い状況にあります。これらを聞いただけでも、「ああ何て大変そうな地域なんだろう…」という感じがするかと思います。県も自覚して、「秋田県人変身プロジェクト」なるものをつくりまして2007年から取り組んでいるのですが、なかなか浸透しておりません。

今、公民館や地域の団体等、JC(青年会議所)などが積極的に取り組んでいるのが婚活です。婚活のイベントに国際結婚の女性たちが呼ばれてスピーチしたり、講話を依頼されたりして、公の場で、国際結婚の女性達が話

す機会が増えてきている面があります。

外国人登録者は4,100人程です。全国でも常に下位5県のなかに入っています。一時期は5,000人ぐらいいたのですが、5,000人を上回るようなことはほとんどないですね。東北のなかでも最も少ないです。また中国帰国者も東北のなかでも最も少ない地域です。

登録者の男女比は、全国平均で女性が53%、男性が47%ぐらいで、少し女性が多い状況で、全国の多くの地域が全国平均と類似した状況ですが、秋田と山形の場合は、女性の割合が突出していて、大体78%とか80%。登録者の8割が女性だということが特徴です。秋田の場合は、2000年以前は男女の割合が半々に近い状況でしたが、90年代後半位から70対30ぐらい、2000年以降は8割が女性というような状況が継続しています。なかでも20歳から32歳の女性が登録者の9割という特徴がありまして、これは国際結婚の女性たちだけではありません。特定活動の研修が多くを占めている。いわゆる農業研修生や企業研修の方々が多く、それから、子どもも含めた日本人の配偶者等の在留資格の方々が多く、そして、登録者に占めている中国籍の割合が5割以上で、中国籍比率は全国3位という特徴を持った地域です。

今日私がお話する能代市については、秋田県がイメージしにくい以上にどんなところかイメージしにくいと思しますので、地域の概要に触れておきます。

秋田県の北西部で日本海に面しています。主要産業は農業と木材加工。森林で秋田杉

活動の概要

1. 団体名

のしる日本語学習会(代表:北川裕子)

2. 活動地域

秋田県能代市および山本郡(藤里町、八峰町など)、青森県深浦町(参加者)

秋田県山本郡藤里町:教育委員会日本語講座講師派遣・運営協力、町立藤里小学校講師派遣

秋田県男鹿市:教育委員会日本語教室運営委嘱

3. 活動概要

日本語学習を必要とする地域在住の外国人・海外出身者・中国帰国者とその子どもたちに対する日本語指導・生活支援および地域住民に対する国際理解・多文化理解の促進に取り組んでいる。教室活動は、行政からの支援を得て公民館・働く婦人の家を会場としている。日本文化学習は地域の専門家を講師に教室活動と連動させて実施している。盆踊り大会は行政、商店街振興組合および商業関係者地域団体との協働により開催している。

【参加者の概要】

学習者:日本人男性の結婚した海外出身女性とその子ども、中国帰国者(帯同来日、呼び寄せ)とその子ども、県立大学研究所研究員とその家族、留学生、ALTなど乳幼児から高齢者まで参加している。出身国は中国、フィリピン、韓国、ロシア、ベトナム、インドネシア、マレーシア、アメリカなど。

学習支援者:退職者(会社員・公務員・教員など)、主婦、会社員・公務員・教員など。活動地域は公共交通機関が十分に発達していないため、日本語指導以外にも送迎を請け負うボランティアなどの協力もある。

【教室の概要】

火曜教室19～21時 成人および学齢期の子どもの日本語指導(日本語能力試験受験対策を含む)、教科学習支援など。運転免許取得や就職のための資格取得に関連した支援も行っている。

木曜教室10～12時 海外出身女性と乳幼児を対象とした託児室内で開催されている日本語教室。小学校内での取り出し学習の子どもと担当者が参加する場合もある。

4. 設立(活動開始)年および活動の歴史

1991年に能代市で初めて迎える中国帰国者家族に対する通訳及び日本語指導を市から委託された北川裕子さんの(のしる日本語学習会代表)が、市の委嘱期間終了後に帰国者家族から継続的な日本語指導を依頼されたことを契機に設立された会である。彼女の自宅での開催期間を経て、93年には市社会教育課に生涯学習グループとして登録し、公民館を会場として週一度の日本語指導がスタートした。95年からは県生涯学習振興課の支援を受け、現在は能代市国際交流担当部署の協力により日本語教室およびボランティア養成講座を運営している。98年からは乳幼児を連れて参加可能な平日午前の教室を開催している。近年では、母が海外出身で日本生まれ・日本育ちの子ども、母の再婚に伴って帯同来日・呼び寄せ来日した外国籍・日本籍の子どもたちの日本語学習・教科学習支援に力を入れている。

を伐採し、それ河口の港に向けて川に流して海から出荷する、歴史的にはそういった事業で栄えた地域です。現在は、大連との定期航路により廃棄物リサイクルや火力発電に用いる石炭の輸出が盛んです。教育面からいうと、大学はありません。ただし、県立大学の木材加工研究所があり、京大と北大に木材

研究専攻があるのですが、そこに来た外来研究員の方々が就職し、家族も居住しているので、研究員や家族の方が日本語教室に参加してきています。

人口は6万人ほどで外国人登録者は237名です。一昨年は350人位でしたが、特定活動の方々が一割減りました。県の数値と同様

に中国の方が多いのが特徴です。

永住者の方はそれほど多くありません。統計では、日本人の配偶者等の在留資格者は、20人しかいませんが、子どもも含めて日本国籍を取得するケースも多いので、日本人の配偶者等＝国際結婚女性数と合致しないということをお話していただきたいと思います。

そして、のしろ日本語学習会の概要です。これをお話していると時間が経ってしまいますので、A4の配付資料に活動の歴史や概略をまとめておりますので、ご覧頂ければと思います(p.41参照)。

簡単に触れておきますと、91年に中国帰国者からの依頼と要望によって始まった教室で、93年からは外国語指導助手(ALT)や国際結婚女性、高校の交換留学生や先に述べた研究員とその家族などが参加してきました。そして98年には平日の日に、子どもも連れて参加可能な教室を設けました。出産後、乳幼児を連れて夜の教室に参加していた方が少なくなかったのですが、2時間の学習中に授乳をすることもあります。そうすると男性も当然いるわけですから、大変な面も出てきます。また乳幼児が夜の教室に来るというのも肉体的にも厳しい状況もありましたから、98年から乳幼児を連れて参加が可能な教室が開かれた訳です。その後、文化庁の担当官がこの教室を見に来たことをきっかけに、「空き教室等を利用した親子参加型日本語教室事業」が開始され、モデル教室として位置づけられて3年間の事業助成を受けました。

今日は国際結婚の子どもの支援と題しまし

たが、実はのしろの教室の場合は、子どもの学習を先にやってきた訳ではなかったのです。日本人男性と結婚した海外出身女性たちの学習支援、生活支援に取り組んできていたところ、彼女たちが直面していく課題が変化していったことが挙げられます。妊娠や出産などで検診を受け、読み書きが必要であることを認識し、学習を進めていく。しかし、子どもが保育園や幼稚園に入園したり、小学校に入学したりした頃から、学校からのお便りが読めない現実や、書類に記述しなければならない機会が増え、これらはどこの教室でも聞かれるところですが、そういった状況から自分自身の日本語学習、日本語能力をつけなければいけないと自覚して取り組みました。それが90年代後半から2000年代の中心だったのですが、近年では、当時生まれた子どもたちが小学生や中学生になってきていて学習の壁にぶつかる、そして母親と共に教室に参加するようになる、そんな状況です。教室の運営者である北川さんは、4月以降は土曜日に子どもたち向けの学習支援、土曜日の教室というのを設けるために取り組んでいるところ

です。国際結婚女性たちの課題が自分自身の課題だったときは、自分が頑張れば済む、自分が何とかすれば済む、だから一所懸命、日本語学習に取り組んできた。ところが、子どもの課題となったときに、子どもの心のケアも含めて、自分自身だけでは解決し切れない大きな課題となってきたことが挙げられます。そこで、ケースを一つ紹介します。

フィリピン出身の大卒の方で、小学校で英語活動の講師をしたり、バイリンガル支援員として小学校で非常勤講師をしたり、地域でもフィリピンコミュニティのキーパーソンとして活躍している方です。資料(『解放教育』)でも触れていますが、この方がシンポジウム等でも発言をして、涙ながらに語っていたのですが、学級担任からあなたのお子さんは障害者ではないかと言われたということです。地元の小学校には「ことばときこえの教室」という言語障害や聴覚障害の子どもたちのための教室があり、そこのテストを受けるよう2年連続で担任に言われたそうです。彼女は、自分の日本語が十分でないゆえに、子どもがこういった状況になるのではないかと非常に悩んで、日本語教室の北川さんに相談し、このことをきっかけに、母と共に子どもも日本語教室に参加するようになりました。

能代の教室は、火曜夜と木曜午前中に行われています。最近、夜の教室に増えているのは、乳幼児の頃に母と共に午前中の教室に参加していた子どもたちです。

日本語教室代表の北川さんは、市内の小学校の取り出し教室(在籍学級とは別の教室で行われる授業)で、週1回指導しているのですが、そのときに「先生」と声をかけてきた子どもがいたそうです。誰かと思ったら、生後数ヶ月の頃から教室にやっていた子どもで、実は、勉強がわからない、日本語も時々わからないということで、思い切って、北川さんに声をかけてきたそうです。そこで、北川さんは、夜の教室に参加したらどうかと誘

い、この2年ぐらいでの学齢期の子どもたちが急増し、北川さんは、学齢期の子ども支援が中心となりつつあると語っています。

こうした子どもたちというのは、木曜日の教室に参加しながら、乳幼児ですから、どこまでわかっていたかという点はありませんが、幼稚園や保育園に入園してからは、社会性や協調性を褒められるような子どもたちだったのですね。日本語教室という異年齢集団、大人との関わりの中で、さまざまなものを身につけていたように思います。例えば、教室に入ったときに、脱いだスリッパをきちんと揃えて並べるとか、それから、おもちゃは終わったら片づけるということが当たり前のようにできるしつけを受けたこと、順番を待つということなどができる子どもでした。保育士の方々によれば、多くの子どもたちが、今それができなくなっているの、日本語教室にいるお母さんたちのことは大変だと思いましたが、子どもたちはそういったしつけがされていて、とても楽ですというような声が聞かれていたので、一見何も問題がないように把握されていた子どもたちだったのです。しかし、小学校の中高学年で教科学習の課題にぶつかることが顕著になってきた訳です。

北川さんは、中国帰国者の子どもたちの入園のときにも保育園の方たちと関わって来ていますが、その時は、保育園の先生たちが、親や子どもとのコミュニケーションがとれないことで、通訳を含めた支援が必要でした。国際結婚の家庭では、日本人である旦那さん

が関わっていることもあり、中国帰国者の時とは違って、乳幼児期に支援が必要になるということはあまりなかった。しかし、小学校中高学年で課題が出てきたというような実態です。

今、火曜日の夜の教室に参加している子どもたちは、日本生まれ・日本育ち・日本国籍、日本生まれ・海外育ち・日本国籍とか、実子でも、海外で生まれ・海外育ちで来日するケース、それからお母さんが再婚、再々婚しているようなケースなどです。それと、母親の再婚に伴って来日する、または後に呼び寄せられる子どもたちの国籍は、日本とかフィリピンとか中国となっています。

では、具体的に日本語教室内での支援と学校内での支援についてお話しします。

日本語教室内では、日本語と教科学習、宿題をやっています。日本語というよりも教科学習のなかで日本語を入れていく形で、教科学習と宿題がメインになっています。「家にいると宿題をやらないので連れてきてやらせます」というようなお母さんもいらっしゃいます。

それから学校内は、取り出し教室やTT（ティームティーチング）サポートで、のしる日本語学習会から講師派遣がされており、それから北川さんによる週1、2回の指導（学校によって回数は異なる）の組み合わせの体制で、小学校内での取り出し授業が、複数の学校で行われています。それと、今はありませんけれども、中学校でも取り出しが行われていました。

今日参加の美恵さんも、教室内と学校内での取り出しサポートの体制で学んでいました。

在籍の外国人児童生徒数が少なく、1人や2人のために指導を行うような場合、能代市内は個別対応、そのときのケース毎に教育委員会と北川さんが交渉しつつ対応するという状況です。一方、藤里町は完全にシステム化しています。

では、日本語教室内での学習の様子を写真で見て頂きます。

（男子児童・生徒が学んでいる写真を指して）一番左にいる男性は、北川さんの旦那さんで高校の教諭です。この子は中3で、まもなく受験です。入試対策の学習指導をやっているようなケース。

これは、中国帰国の女性と70代の男性ボランティアが、ペアになって学習しているもの。

これは、中国帰国者三世の日本生まれ、日本育ちの子どもで、小学校3年生ぐらいになって急に学習のつまずきなどの問題が出た子どもです。そのため、木曜午前の教室でボランティアをしていた女性が去年の4月から、彼女のサポートとして学校に採用されていて、夜の教室に児童が参加しているので、ボランティアの女性が、夜の教室にも参加している様子です。昼も夜も同じ人が教えてくれるので安心して学んでいるのか、最近は笑顔も出てきて、意欲的に学習に取り組んでいます。

これは、小学生で来日して、藤里町なので、学校のなかでもサポートもあって、工業高校に進学した生徒です。日本語能力試験一級も合格しています。教室内では、学校の宿題を

やっていて、実は、この隣で美恵さんは勉強していたのです。彼は、今は、秋田県立の専門校といって、高校を卒業した後、専門の学校に進学して、自動車関係の資格を取るために頑張っているところです。

(高校生と子どもたちの写真)これは、『解放教育』の論文でも触れているもので、地元の進学校、美恵さんの出身の高校ですけれども、能代高校の放送部の生徒たちが、NHKの放送コンクールにドキュメンタリー映像を出したいということで、教室にやってきたことをきっかけに、1年ほど学習サポートに参加した様子です。先ほど話したように、市内には大学がないものですから、高校生たちを小学生の教科学習のサポートに活用している状況です。彼・彼女たち自身も、教えることによって自分たちがかえって学んだというような、そういったこともドキュメンタリーでは、述べていますし、進路にも影響を及ぼしたようです。こんなふうに非常に楽しそうにしています。

この写真は、黒板側では北川さんが教室形式で指導している様子です。ある一定の日本語レベルの人たちは、教室形式で一緒に学び、他は、個別対応で、教科学習をしているケースとか、介護福祉士として働いている方が、介護関係の資格を取るためにヘルパー二級講座を受講している中国帰国二世の女性に教えている様子で、こういったさまざまな学習者やボランティアが混在している、大人も子どもも年齢もさまざまな人たちが同時に学習を進めている状況です。

これは、フィリピン出身の小学生と、左は



フィリピン出身の女性です。黒板に「名前」と「書く」という語だけを書いて、学習者は、そこに自分なりに作った文章を埋めていくものです。我々は、「北川方式」と呼んでいるのですが、助詞と動詞を抜いた形で問題を提示して自分で考えて書いていく、全員こんなふうに黒板に書く学習活動で、その結果、他の人がどのように書いたかも読んで確認できるということです。一番左に書かれているものだと「ああ、男の人が倒れています、その次「おお、車が倒れています」、4番の文のところでは「おお、女の人の服が破れています」と、同じシーンを見せてそれぞれがどんなふうに考えるかを黒板に書いて、お互いのものを確認しながら学習を進めていく、こういう方法で日本語学習は行われています。私は日本語教育が専門でないので、これを言語学に整理することは困難ですけれども、興味のある方もいらっしゃるかと思って少し紹介しました。

残りの時間で、松嶋美恵さんに、教室に参加していたときのお話をさせていただいて締めたいと思います。藤里町で行っている、外国籍児童生徒の在籍が少数地域のシステム化については、午後のワークショップの際に紹介させて頂きたいと思います。

それでは美恵さんにお話をさせていただきましょう。

松嶋美恵 こんにちは。東京外国語大学の松嶋美恵です。

私は小学校6年生のときに日本にきました。そのときに初めて日本語教室という存在を知って通い始めたのですが、本当にアットホームな教室で、北川先生を始めとするたくさんの方の先生たちがすごく親身になって教えてくださいました。

藤田 彼女の場合、学校でもサポートがありましたので、その点も話して下さい。

松嶋 そうですね。学校では、常に1人の先生がついてくださって、本当に不安なこととか、わからないこととかあったら、すぐに確認して聞けるような状態だったので、すごく安心感がありました。あとは、ついてくださった先生が、日本人の方なのですが、逆に私はその点がすごくよかったなと今になって思います。というのは、中国語の知識とかが全くなくて、純粋な日本人だったので、仲よくなっていくにつれて自分も日本人と仲よくなれるのだなという自信がついたんですよね。だから、本当に日本人の先生でよかったなと今は思っています。

藤田 今、彼女の弟が教室に参加しているのですが、美恵さん、弟のことと、弟やお母さんが教室に来ていることについてどう思いますか。

松嶋 そうですね、お母さんは30歳ぐらいのときに中国から日本に来たので、どうしても日本語がそこまで上手ではないのです。なので、弟はこっちで生まれたのですが、弟も家のなかではやっぱりネイティブの日本語が余り聞けなくて、だから日本語が余りうまく話せないんじゃないかという不安があって日

本語教室に通わせているのですが、本当にすごく純粋な日本語、日本人の日本語といっぱい触れ合う機会ができたのですごく助かっていますね。あと、小学校の勉強とかも何でも教えてくださるので、本当に全面的なバックアップという感じですごく助かっています。

藤田 何かいいことばかりこっちで言わせてみたいんですけども…(笑)。彼女は非常に優秀で、自分の関わりたい仕事について学びたいということで、大学は、中国の関係に目を向けていったのです。受験のときに中国語の読解でものすごく苦労して大変だったという、中国語での読み書きの難しさも知ったというような状況でした。

先ほど話したように、私が、成人教育が専門なので、子どもたちの目線でどれだけお伝えできるかということもあって彼女に話していただいたのですが、実は、大学生たちがお互いのことを語り合う会があるので、非常にいい機会だと思って今回誘って参加してもらいました。

参考文献

藤田美佳

- 2008 「日本人男性と国際結婚した海外出身女性の日本語学習——子どもの成長を支える親としての学び(特集 綴る子ども・表現する子どもを育てる)」『解放教育』490: 33-43。
- 2010a 「外国人住民の生活を支援する」妻鹿ふみ子編著『地域福祉の今を学ぶ——理論・実践・スキル』第14章、pp.214-226。
- 2010b 「外国人少数在住地域における「多文化の子ども」に対するサポート——秋田県藤里小学校の取り組みを基にして」『国際教育評論』7: 27-40。